4.足袋産業(昭和)の発展と足袋蔵の建設

進化を遂げた行田の足袋工場制製造(工業の発展期)。昭和初期には全盛期を迎えるに至っている。

昭和２年(1927)に始まった金融恐慌は、行田の足袋産業にも深刻な影響をもたらし、この危機に、大阪・堺の「福助株式会社」が始めた工場制分業生産システムを導入して生産費を減少させ新製品を全国へ売り込みました。昭和９年「福助株式会社」忍町に出張所を設置しています。こうして現在にまで続く分業生産体制を確立した行田の足袋産業は、戦時下、昭和12 年(1937)の日中戦争を契機に陸軍が行田の工場を管理・監督するようになり、翌年から防寒帽の縫製が命じられました。一方、足袋製造・販売自体も昭和 12 年以降戦時統制化に追い込まれ、休業する工場が続出しました。しかしながら不況下の過当競争を勝ち抜き、昭和 13 年(1938)には年間 8500 万足、全国シェア約 80%を生産する”日本一の足袋のまち”になりました。昭和 17 年(1942)には 184 の足袋業者は 24 の有限会社と 1 個人商店に企業統合され、行田足袋産業は軍需生産一色に染まってゆきました。

そしてその背景には、生産量が増加しても企業統合等による大企業化には進まず、逆にのれん分けして次第に足袋商店と足袋蔵が増加、ピーク時には２００社以上の中・小規模の足袋商店が共存して一大産地を形成していた、行田の足袋産業ならではの特色があったのです。

----------昭和戦前の足袋----------

昭和戦前の足袋蔵エピソード①昭和初期のノコギリ屋根の木造洋風工場

鈴木勝次郎商店は明治 40 年に創業し、大正６年にはノコギリ屋根の大規模足袋工場(現在のスクール工場)を建設して、電動ミシンによる大量生産を始めました。その後、組み立て工場であったこの工場を買い取って生産を拡大、歌舞伎の”勇み肌”から名をとった「イサミ足袋」の商標で行田有数の足袋メーカーへと成長していきました。この工場は、現存する行田最大級のノコギリ屋根の木造洋風工場で昭和初期の建設と伝えられています。

昭和３年足袋商店の大規模な工場が多数進出してきました。そうした住居地から完全に独立した大規模足袋工場のさきがけとなった工場です。個人商店から企業へと発展して行った昭和初期の足袋産業を象徴する近代化遺産です。

昭和戦前の足袋蔵エピソード②昭和 13 年、日本一の足袋のまち

東北・北海道に販路を伸ばした行田の足袋商店は、「力弥足袋商店」なら八戸、「道風足袋商店」なら 尾去沢鉱山といったように、問屋を通さずに各々が地域単位で独占的な販売網を築き、協調しながら販路をやがて全国そして海外へと広げて行きました。この頃の行田の人々は、老若男女を問わず皆が寝食を惜しんで工場や家庭で足袋づくりに励み、まち全体にミシンの音が響き渡っていました。**昭和 13 年(1938)には “日本一の足袋のまち”になったのです。**

昭和戦前期には鉄筋コンクリート造、モルタル 造、木造の足袋蔵も現われ、大小様々な多種多様の足袋蔵が建てられました。

■『奥貫蔵』大正～昭和初期の足袋蔵(土蔵) “足袋産業の栄華を伝える足袋蔵”

「奥貫蔵」は奥貫忠吉商店が大正時代～昭和初期頃に建設した足袋蔵です。奥貫忠吉の長男賢一郎は明治 20 年東京日本橋の輸入織物問屋に奉公に行き努力で出世し、やがて貴省し足袋商人に転身した人物です。わずか数年で賢一郎氏は北海道から三陸海岸の広い地域で得意先を広めることに成功しました。自らの顧客の開拓により”問屋を通さずに足袋を直販する方式”です。さらに日露戦争、第一次世界大戦による戦争景気で財を成し、足袋工場を建設するとともに、その商品倉庫としてこの足袋蔵を建設したものです”足袋産業の栄華を伝える足袋蔵”です。

昭和初期から 9 年までに建てられた足袋蔵。「奥貫蔵」「田代蔵」「鯨井家倉庫」「時田足袋蔵」「行田窯」。

■『忠次郎蔵』昭和 4 年(1929)の店蔵(土蔵)

足袋原料問屋小川忠次郎商店の店舗兼住宅として昭和 4 年頃に完成(大正 14 年に棟上げ)した、行田最後に建てられたと思われる店蔵です。小川忠次郎は明治 40 年に熊谷で魚商を始め、大正 9 年には行田で足袋原料問屋を開業しています。忠次郎蔵は平成 16 年に『NPO 法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク』の事務所、及びそば店『忠次郎蔵』として活動しています。「翠玉堂」町屋、「小川源右衛門蔵」店蔵が建てられています。

■牛懐石『彩々亭』昭和元年・7 年・10 年の住宅兼事務所を改装したもの。

足袋屋の小僧から身をお越し、力と押しの世渡りで一代にして財を成し、参議院議員まで登りつめた荒井八郎が昭和元年と 7 年さらに 10 年と 3 回に渡って建設した住宅兼事務所を、約 10 年前に改装した懐石料理亭です。かつては”足袋御殿”と呼ばれた贅をつくした建物の中で、美しい庭を眺めながらの懐石は絶品です。銀行建築の「武蔵野銀行」が建てられたのもこのころでした。

そして『牧禎舎』昭和 15 年(1940)の事務所兼倉庫と工場の建設を経て、昭和 16 年(1941)太平洋戦争へ突入しました。

昭和戦前 http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/011.pdf

戦前棟上げ http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/106.pdf

④戦前の足袋蔵